

味は格別だった。

【執筆者の紹介】

岐阜県瑞浪市在住

昭和十五年 岐阜師範学校卒業

土岐市泉町小学校新任

十六年 中部四部隊入営

豊橋陸軍予備士官学校入学

十七年 任陸軍少尉

十九年 任陸軍中尉

二十年 日ソ開戦 シベリアに抑留さる

二十二年 帰国復員

二十三年 教職復帰

土岐市土岐津中学校校長を最後に勇退

全抑協では県連事務局長として永年活動されまし

た。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

静岡県 小川 賢 介

私は、千葉県銚子市に大正十年三月二十八日生まれた。家族構成は、父、母、男六人女四人の兄弟姉妹で、この中から男二人が病死。私は次男である。

昭和十七年四月、私は現役兵として三島市中部第九部隊(野戦重砲第二連隊)に入隊。一期の検閲後の十七年十月渡満開始。一個中隊四十人で六個中隊三百人、他、将校二人、下士官十五人程の編成で三島駅を発つ。兵隊は完全武装で下関より釜山へ。それから貨車で京城、新義州より満州に入った。貨車の中は白く凍りついた。

三日程して錦州に到着、錦州の部隊官舎は、支那軍の放棄した兵舎をそのまま我が軍の宿舎として使用していた所に入ることとなった。それから二カ月過ぎた十二月二十五日に部隊の移動が始まり、北の方の牡丹

江省八面通の兵舎に移る。八面通の演習訓練は想像以上に厳しいものであった。

昭和十八年四月に憲兵下士官募集の通達があり、早速私は応募し試験の結果合格、新京憲兵教習隊へ入隊。法律、警察、教育、銃剣術、語学（ロシア語選択）を専属に受け、半年程して凶らずも胸膜炎を患い新京の陸軍病院に入院。その一カ月後に教育隊の退校を命ぜられ、また元の野戦重砲部隊（三七六五部隊）に戻り、元の一兵卒として勤務。

昭和二十年三月、綏南第八四八部隊大山隊へ転属、陸軍上等兵。綏南での新部隊は満州各地から摘出された歩兵砲部隊で、大山少尉という温厚な将校で、平生の訓練は緩やかでのんきなものでした。

昭和二十年四月一日よりムーリン地区へ陣地構築のため派遣、山崎少佐の馬当番兵となる。旅団司令部兵舎に居住。同少佐はムーリン地区を広大な範囲にわたって陣頭指揮をとっていた。

昭和二十年八月九日未明の三時すぎに非常呼集があり、全員営庭に出たところで某将校が制服姿で「ソ連

が侵攻して来た！ 各分隊は武装し集合、戦闘態勢に入れ！」、後はただ無我夢中でムーリン地区の山でひとまず集合。振り返ると敵の照明弾によって部隊兵舎が怪しげに見えた。間もなく部隊兵舎は焼き払われ、既小舎も焼かれはじめ、兵隊等はすべて山の上へ後退するよう命ぜられた。大部分の将兵、馬などが山に後退してから、夜中に連隊長の幕舎に突然私と田子佐三上等兵が呼び出され、国境に残っている留守部隊（約八十人の将兵）を誘導して来るようにという命令のもとに、夜中の一時に二人は国境へ向かった。

ソ連の侵攻してくる道を二人で勇み発ち任務を遂行しようとして誓い合ったものの、随分無茶な命令を出したものだ。二人は悲痛の想いで国境へ向かって行った。そして夜が明け二人は用便のため道路下の草むらで用を足し、およそ二mの所にある道路上を小型戦車が進んで来るのに気がつき、危険を感じて草むらの中を反対側山あいに向かって退散、敵はこちらには目もくれず我々二人の来た方向へと進んでいった。その後敵の機動部隊が続々進行してくる。あの時、我々二

人が道路下に降りていなければならぬと鉢合わせとなり撃ち殺されていたと思うと身震いがした。山中に逃げ込んで命を取り止め、思わず二人で苦笑いした。先頭的小型戦車の上に、日本の奴を見たら撃ち殺してやるぞとばかりピストルを片手に物々しい形相が印象的であつた。

この後二人は道路には出られなくなり、山中を北の方に向かつて草木をかき分け歩き回つた。やがて日が暮れ真つ暗になり、馬の歩くままにまかせているうちにふと下方をかすかに道路らしきものが見え、思わずまた道路に下り「歩き良い」などと言っていると、遠くの方に自動車の明かりが見え始め、「ああ、また敵の自動車だ！」思わずすぐそばの側溝に寝そべり死んだ振りをしていた。そこを敵か味方か判らない車がゴーゴーと我々に構わず走り去つて、難なく一命をものにした。それから絶対道路に出ないようにしようとして二人で申し合わせた。とにかく二人は身の安全を守りながら北の方を目指した。そうこうして山の中を歩いていると馬もろとも湿地帯へ入り込んでしまい、驚い

た馬は安全地帯へと逃走。その時私は落馬して一時人事不省となつた。しばらくして、私は戦友に抱きかかえられ「おお気が付いたか、目を覚ましたか」と言われ、危ない一場面を戦友に抱きかかえられ助け出された。

それからまた元気を取り戻し今迄どおり馬で歩いてみると、騒々しい人声、車の音がしている。小高い所から下方を見るとソ連の機動部隊が延々と長い列をなして進行しているのが目の当たりに見え、ほうほうの状態でその場を反対斜面の山中に逃げ去り、難を逃れることが出来た。

次に山の中から日本人らしい兵隊、女子供数人の一団が国境方面から避難逃亡して来たが、夕闇の中で双方とも何国人か判断がつかない間に一夜を木の下や土手のかげで過ごした。夜明けと共に相手方の顔を見て紛れもなく日本人同士だと確かめ合い、それからは心一つにして目的地へ行動を共にしようと言い、一緒に行動するようになった。やがて朝になりお互いに食糧の持ち合わせがなかったため、相手方のリーダー格の

人が「その馬を皆の食糧に提供してくれないか」と言いだし、私たち二人には大切なものなのでこの要求を拒否。仕方なく山道をしばらく走行していたところ満人の家（無人）を発見、家の中に入ると米、麦、稗が見つかり早速食事した。馬に積み込み馬の件は一件落着、また元のように一団となって目的地へ向かった。

腹ごしらえが出来て、とある平坦な野原に幕舎が見え、その傍らに下士官の姿が現れて、私たちの姿を見て「君たちはどこから来たか？　日本はもう戦争に負けた！」と言われ、一同はびっくりしてお互いの顔を見合い、信じられない気持ちでその下士官の言う通り目的地（東京城）へと向かった。するとどこからともなく日本の将兵が現れ、一緒に東京城へと向かった。途中、ある日本兵数人が私共に声をかけ、このまま別れ自由行動で朝鮮を目指し逃走しようと誘いがあったが、これは危険だと判断した。日本の敗戦は口惜しいと思ったが今の我々にどうする術もない。おとなしくソ連に投降しようと思心。

東京城の収容所へと向かう途中で、ソ連将兵が乗馬

姿で迎えるように飛んで来た。乗馬姿の私に下馬を命じたが、私はロシア語を少し知っている、だから連絡のために馬を使うと言った。すると相手方の将校らしき人がちよつと来いと言ったので馬から降りて直接交渉に入った。日本の将兵は大勢いるものの言葉が判らず全く困惑状態、日本将兵の中から英語で話し掛けるもソ連将兵誰一人通じず、お手上げで話にならなかつた。私が下手ながら何とかロシア語を書いたりして通訳に仕立てられた。「日本は戦争に敗れ国土全体が爆弾で目茶苦茶になってしまった、アメリカの原子爆弾で日本の都市（何処とは言わず）は跡形もなくなってしまうぞ！」と言われた。私がソ連の将兵と話している様子を見て、ある日本の将校は敗戦の口惜しさか恐れ顔をしながら、「一兵卒のくせにロシア語を喋りながら得意になるな」と言っていた。敗戦の口惜しさを私に当ててきたのだ。

私は、部隊を田子上等兵と共に伝令で隊を離れた後、田子上等兵とも別れていた関係で、九州の歩兵隊（須田少佐 群馬県出身）に合流させてもらい収容所

にひとまず落ち着いた。およそ二千人の將兵、地方人、女子を合わせての人員で、詳しい数は不明であった。

東京城の收容所に日本將兵が收容されてからロシア兵が略奪を始め、その都度私が呼ばれて交渉に行つたがほとんど取られ損に終わった。用便中に万年筆、時計、金銭等を持ち逃げするロシア兵が毎夜の如く横行していた。

八月二十一日、突然ロシア軍より、近いうちに移動があるという達しがあつた。最初はどこへ行くと聞いても「知らない」と言つていたが、翌日夕方頃になつてようやく日本へ帰ると言つてきた。我々日本將兵は躍り上がつて喜んだ。

次の日の夕方になつてからダモイだから準備をせよと言われ、営庭に集合。人員点呼の後四列縦隊で行軍が始まり、駅の停車場へ行くと思つたら、東京城より四キロメートル以上も行軍の後、鉄道線路の近くの野原に集合させられた。日が暮れてから二時間も三時間も待たされた揚げ句に夜中の十時過ぎにようやく貨物

列車が来て、嚴重な人員点呼の後貨車に乗つた。ロシア兵にどこへ行くと聞いたが行き先は言わなかつた。

真つ暗な貨車のそばを通る將兵に何回か行き先を尋ねると「日本」とだけ言つて、さんざん待たせた揚げ句深夜に発車。それから何時間位走行したか、汽車が止まり、ここで給食、給水、用便も済ますよう指令が出た。外はまだ暗く夜明けの四時頃かと思われた。一時間くらい停車、やつと出発……十一時頃にロシアの小さな部落の駅に着く。直ちに用便、給水等を済ました。駅を少し過ぎた所で駅名の読みとれない所で止まった。もはや日本へ帰すなど変だと、ロシアへ連れて行かれることを疑い始めた。この頃から貨車内の兵士等は朝鮮籍由は嘘だ、シベリア行きだといふ噂でいっぱいだった。

以上のようなことから帰国などは考えられる余地はなく、終戦の詔勅などは知る由もなかつた。ロシア軍に投降してからは武装解除になり、ロシア軍の命令ですべての行動をとるようになった。隊ぐるみ投降したものは、上官、下士官、兵の序列はあつても元の軍隊

のように上官でもあまり大きな顔をしていられなくなった。つまり、ソ連の将兵の指揮で行動するようになったのだ。

日本兵を乗せた貨物列車が駅へ着くと物珍しげに地方人が見に来ることはしばしばあった。十八、十九歳の少女が物珍しげにそばに来て、「サムライ、ゲイシャ」などと言っていた。何と時代遅れのことを言うと思った。しかもこの少女は赤いスカートに素足で貨車のそばまで歩いて来た。ソ連の一般国民生活がいかに貧相であるかが判った。十五歳ぐらいの男子二人がタバコをスパスバ吸っている姿、ヒマワリの種を食べている子供達……このような姿をまともに見せつけられ哀れさを感じた。

東京城を出てから二週間ぐらい経て止まった所は、樺太の対岸から八百キロ西にコムソモリスクという都市があった、この地に我々は抑留されることとなった。時は一九四五年九月十日頃、コムソモリスク第四收容所にひとまず收容されることになり、満州から八月二十五日頃より貨車に閉じ込められて日本へ帰ると

言って騙されて来たことを思うと、この先寒い收容所生活が思いやられた。宿舎とは名ばかりの板張り、毛布は二人で一枚の毛布。食事はコウリヤンの粥、黒パン一切れ、たまに米の粥が飯盒の蓋に一杯、実に粗末なもの。

收容所の所長は若いハンサムな陸軍大尉、以下陸軍少尉や下士官。この中に女性下士官がそれぞれ五人ずつ、兵隊（主に警備兵）十人くらい。

九月十日頃より作業開始。朝八時に営門前に五列に並び人員点呼、後、作業場に向かう（これには必ず警備兵付）。伐採、自動車工場、鉄道の石炭積み込み、鉄材の積み下ろし等がこの街の主な作業のようである。二十、三十人位のグループになって出掛けた様子。私はロシア語が判ったため主に收容所内の炊事、倉庫、医務室等を回り、その他所内には大工、床屋、鍛冶屋等の技術屋の職場も設けられていた。私は通訳として第四收容所に一年間、第十一分所に一カ月、第一收容所に一年間勤務し、直接作業には加わらなかった。

収容所の入浴は、週に一回街にある大入浴場へ行き、浴槽はなくシャワーまたは桶で洗い流す簡易なものだった。あまり綺麗になれず、シラミ等はこの浴場で移ったように思う。

着衣等衣服類について、特に厳寒越冬用は、元日本軍の防寒外套、帽子、手袋等の支給があった。

食事は、野菜はジャガイモとキャベツ、穀物は米、高粱で、一日三回。それぞれ飯盒の蓋一杯ずつであった。食物の不足分は所内物品販売所から購入した。

休日は月二回、碁、将棋をして過ごした。

収容所は、採光は普通、採暖は良好。居住性は逐次良好となったが、依然として窮屈であった。

第一収容所に来てからソ連のマルクス・レーニン主義を取り入れた共産主義をよく心に植え付けられた。共産主義が至上最高のもので、こういう精神を身につけて毎日の労働に励んで行くよう教育された。

収容所生活全般については、収容所を自主管理することにより労苦が軽減されたこともあった。しかし雇主の方針では、採り入れる所もあり採り入れない企業

主も多かった。一九四六年後半頃より企業側で積極的
にノルマの向上を図って労苦が軽減されてきたような
報告も聞いている。

懲罰についての体験はないが、所内営倉に一日入れ
られた兵隊もいた。

私は、健康を保ってソ連側の将兵の指示通り、また
企業主の指示方針に従うべきだという自覚を持ってい
た。あくまでも健康で良く働き、不正はしない、ソ連
側に素直であること。そして、苛酷な抑留生活の中
で、ソ連側の将兵に気に入られるように明るく活発で
あることを心掛けた。

一九四七年九月十五日頃、帰還の知らせを受けた。
コムソモリスク市よりシベリアまで約千二百キロメー
トルの道のりをナホトカまで鉄道で行き、一九四七年
九月二十日、この時の帰還者一千一人は一人も脱落者
がなく、全員乗船した。途中の日本海は波高く、船酔
いのため半数ぐらいの帰還者は食物が食べられなかっ
た。

九月二十三日、舞鶴港へ上陸した。

私はコムソモリスク第一收容所でソ連将校による民主教育を受け、通訳書記として一年間を過ごさせてもらった。

一九四七年六月に初めて帰国の通達があった。收容所の健康のすぐれない兵隊だけに帰国命令が出、彼らは帰国していった。

收容所長はこの頃、ほとんど毎日のように日本将兵に対してのソ連民主教育に専念していた（近い将来日本へ帰ってからもこの精神を貫くようにという願いを込めて）。こういう教育の末、九月半ば頃に第二回の帰国命令が出た。ソ連民主教育を真面目に受け良く働いたので帰国させることになった、よって帰国者一千人の名簿を作成せよという指示で、私は自分を含めた一千一人の名簿を作成した。これを見た所長は最後の一人であった私の小川という名前を消すように言ったが、是非私を含めた員数一千一人として帰国させてくださいと懇願した。すると翌朝、所長独断の帰国許可が出た。この時までソ連の将校は頭の固い融通のきかない国民性かなと思っていたが、予想外に恩情のある

人で、唯々感謝あるのみといって礼の言葉述べた。九月十八日出発の朝、收容所の所長その他の下士官、兵士の見送りでコムソモリスク駅の広場から貨車で我々千一人の日本将兵は一路ナホトカへ向かった。ナホトカへ着いてからソ連官憲の一人一人の検査点検の末、一人も残さず帰国許可となった。

九月二十日帰還船「恵山丸」が港に横着けになった。日本人船員の姿の見える船に嚴重なチェックをすませ乗船、出航。船上から見下ろすと、ソ連将兵数人、女性下士官三〜五人が手を振って見送っていた。

サヨーナラ……。

皆同じ感慨をもってナホトカを去って、いつまでもいつまでも港の見えなくなるまで見入っていた。船内生活は至って和やかであったが、荒れ狂う波の起伏で大揺れとなり、気分の悪くなる人が大勢出る騒ぎだった。

九月二十三日舞鶴の港に到着。上陸検疫の後宿舎に落ち着き、厚生省の役人の事情聴取、身体検査。米軍将校立ち会いのもと。

一軍隊に三年五カ月、抑留二年一カ月、すなわち五年六カ月の空白。昭和十七年以前の東京荒川の会社は空襲のため再就職出来ず、郷里の両親のもとで農業の傍ら味噌製造業。後、修善寺駅前地区に店舗を構え（三十年八月より）現在に至っている。

私の軍隊とシベリア抑留

静岡県 齋藤 肇

伊豆半島の中央部天城山の北麓、『伊豆の踊子』で有名な川端康成執筆の宿や井上靖の出身地の湯ヶ島温泉郷の天城湯ヶ島で、大正十三年二月十五日に祖父母と父母の四人暮らしの家庭で長男として生まれ、後に七人の兄弟で家族は十一人の大所帯となった。農業の傍ら、父は林業で木材の伐採を生業として一家の暮らしを立てていた。

昭和五年、小学校へ入学して間もない六月二日、昭和天皇が天城山八丁池へ行幸された折、新築された小

学校へ往復立ち寄り休憩された。玉座は二階一室になり、高学年の掃除当番だけしか入室出来なかった。

昭和十三年三月、湯ヶ島尋常高等小学校卒業。

昭和十四年三月、大仁准教員養成所修了して国鉄の採用試験に合格したので東京、川崎市小倉の東京鉄道局新橋運輸事務所新鶴見検車区へ勤務した。当時東洋一の貨物列車の操車場で、構内は南武線と平行して尻手駅から矢向駅、鹿島田駅を経て平間駅まで延長四キロメートル・幅二百メートルの広い駅であった。中程に駅の本屋と機関区検車区があり、上り下りの到着した列車を一両毎切り離し、行き先別に分け新しく列車を編成するところで、検車区は到着した列車の検査と新しく編成された列車の出発検査を一昼夜交替で担当し、その他四十日定期検査と六カ月定期制動検査があつて、期日が来た空車は検車区の引込線へ入る。私は四十日検査の担当で殆ど日勤だった。支那事変から大東亜戦争に必勝の決意で戦時輸送に励んでいた。

昭和十九年正月適齢検査を受け、工兵甲種合格で入隊の日を待ったがなかなか通知が来ない。一緒に検査